

## 展覧 読みを大切にす

柴田佳美

歌集であった。

それから、作品を読むことで、簡明な力強さを学んだ歌集があった。斉藤梢の第三歌集『青葉の闇へ』である。

忘れない忘れられない忘れない大震災を

着たり脱いだり

わが胸の花畑みな大津波に吞まれてしま  
つて枯れてしまつて

泣くやうに泣くやうに咲くしらうめの小  
さい息の十一日よ

東日本大震災を経験した作者。一首目、上句は、大震災への沈痛な思いを強い韻律で表現している。下句では、まるでそれが服であるかのように、「着たり脱いだり」と表現する。

二首目、花畑のような心持ちが奪われてしまったという精神的な被災を、繰り返しのリズムにのせて美しく悲しく歌う。三首目、十一日、作者は梅の「小さい息」を感じている。

わかりやすい言葉で写実する力強さに、豊かな韻律、そして「花畑、うめの小さい息」など現実を離れたところが加わって、ふと思いを深める。そのような表現が印象的な歌集であった。

きちんと読むことは難しい。優れた鑑賞に触れて読む力を養い、読んで得た知識を作品に生かしたい。

婚の日は杳かとなりて夫婦さぶ冬の苺を

妻とわけつつ 影山一男『天の葉脈』

この歌は、梅内美華子著『短歌 うたことば辞典』の「夫婦」の欄に、掲げられている。

『冬の苺』を二人で静かに食べる。日常の優しさに夫婦らしくなったなという感慨が静かにわいている」との鑑賞が付されている。

新しい表現は知ろうとしなければ身につかないと思う。収載されている多くのうたことばと引用歌を、優れた鑑賞に助けられて読むことができた。おそらく膨大な時間を費やして記されたエッセンスには、読者が語彙や表現方法を増やして作歌に生かすきっかけが詰まっていると感じた。

また、作品から感動を味わうとき知識は強く体に残ると感じる。そんな歌集に出会った。小島ゆかりの第十六歌集『はるかなる虹』である。

反戦ははるかなる虹見えながら指さしな  
がらだれも触れず

歌の広さ、視点の大きさをこれほど感じる歌はないように思う。目に見えない、反戦と

いう観念を、虹に託して表現している。このような深い心理表現に驚き感動をした。

ここで第五歌集『希望』の虹の歌を読みた  
い。

希望ありかつては虹を待つ空にいまは  
その虹消えたる空に

印象深い初句から始まるこの作品が私は好きで長い間心に置いて来た。晴れやかで美しく、時間の推移があり、前向きなものを秘めていると感じる。

『はるかなる虹』の一首と同じく、どちらも不可視のものを詠んていながら少し異なつた、さらに厚みを増した印象を受けた。

虹の歌を二首読んだが、他にも次のような

歌が『はるかなる虹』にはある。  
車椅子の母と行くときむかうから亡き父  
の空の車いす来る

夕雁のごときさびしきよく聞くがよくわ  
からない言葉が増えて

マスクする人ばかりなる交差点はなびら  
はこゑのやうにうづまく

右のような歌に、感動せずにはいられない